

6. 反日の事例：日本政府の外交失策がもたらした被害

(1) 関連する人種差別撤廃条約（ICERD）

- ICERD 第 6 条

(2) 主要点

日系カナダ人コミュニティのメンバーとして、委員会に次のことを表明するよう求める。

- (a) カナダでは、日系人、日本人家族やその子供たちが「南京大虐殺」という悪意に満ちた捏造プロパガンダ・キャンペーン宣伝の標的にされている。ところが、日本政府は、私たちがプロパガンダから守るための必要な情報を提供するのを怠ってきた。
- (b) 日本政府はこのプロパガンダが政治的なものであるという現実を全く認めず、その対応を歴史家に委ねてきた。だが、歴史家というのはそもそも調査、研究、分析、論文等の学術的なことが仕事であり、情報を一般に広めたり、外国の機関と連絡を取ることではない。
- (c) 2008 年、日本の前途と歴史教育を考える議員の会が「南京の実相」を(*1)出版した。この本には 1937 年 12 月の南京戦の事実が書かれているが、日本政府はこの本を利用せず調査の結果を埋もれたままにしてきた。これでは、日本と日本人に対する捏造キャンペーンに日本政府が加担していると同じである。この調査では一次資料を中心にしたもので「南京戦は通常の戦闘であり、それ以上でも以下でもない」(*2)と結論づけている。また、市民の多くは既に避難していたため戦闘の巻き添えにはならず、他には約 20 万人の市民は国際安全地区に避難していた。また、調査では、南京事件がどのようにして政治宣伝化されてきたのかが解き明かされている。
- (d) カナダでは政府機関、メディア、学校などの社会のあらゆる階層に酷い反日の歴史捏造が浸透しているが、日本政府はこのような状況からカナダ在住の日本人を守る義務を怠ってきた。
- (e) 日本政府は、プロパガンダを宣伝する側に対して不用意にもその場しのぎで謝罪を繰り返してきた。それは結果として捏造キャンペーンに加担してきたのと同じである。日本政府が事実と向き合わないために、カナダ在住の日本人は社会的不利益と不名誉を受け、更には日系カナダ人と祖先・祖国を分断してしまうこととなる。

(3) 背景

以下に登場するサダコは仮想の人物だが、この話は国外に住む日本人や日系カナダ人が直面している困難な状況を表すものである。実在の人物名や実際の出来事も含まれている。

~~~~~  
オンタリオ州トロントで、数年前に7年生（中一）の西村サダコの作文が土曜日本補習校(\*3)の新聞に掲載されました。作文のテーマは彼女が初めて「南京大虐殺」に直面した時のことで、それは彼女が平日通っている地元の学校で別の生徒から聞かされた話でした。サダコの作文は、祖先の道徳に対して真剣に問いかける思慮深く、かつ苦悩を反映した内容でした。

サダコは高校生になりました。10年生（高一）の歴史の授業の第二次世界大戦の章で同じテーマが出てきました。彼女の歴史の先生は、以前、研修旅行で中国に行き戦争記念博物館を訪問したこともあり、このテーマについて特別に興味を持っていました。地元の活動団体から無償で提供された副教材を使い、先生は生徒たちに「忘れ去られたアジアのホロコースト」という特別学習を行いました。副教材は生存者の証言、元日本兵の告白ビデオで、また731部隊のオンラインビデオは、ナチスの科学者(\*4)がユダヤ人の子供たちにしたと同様に、日本軍がいかに残虐で残酷なことだったかということを説明するものでした。

ナチスのホロコーストは知っていてもアジアで同じようなことが起っていたとは知らなかった生徒たちはショックを受けました。そして、中華系カナダ人が多く暮らすカナダでもアジアで起こったホロコーストと同様の出来事も記憶に残すことが重要ではないかと思いました。そこで先生はオンタリオ州議会に出された「南京大虐殺記念日法案 79」(\*5)について説明を始めました。

先生は生徒たちにアジアのホロコースト記念日は日本人を責めるためではないのです、といました。日本軍が犯した侵略戦争のために戦時中、日系カナダ人はキャンプに強制収容されました。それについてカナダ政府は1988年、生存していた家族に公式に謝罪し、賠償金を払いました。日本の人たちも被害者です、と先生は思慮深げに語ります。当時、日本は軍事独裁下で、天皇崇拝で洗脳された日本人は男も女子供も最後の一人まで戦わなければならないと信じていたのです。中国侵略と真珠湾攻撃で始まった戦争は、広島・長崎の原爆投下で日本が無条件降伏してやっと終わったのです。

生徒たちは日本人の同級生サダコと同じ名前の女の子が登場する「サダコの千羽鶴」を5年生の英語の授業でならったことを覚えていました。登場するサダコは広島に住むアスリ

ートを目指す女の子でしたが突然襲った原爆病のために若くして亡くなったのです。

先生はアイリスチャン著の「レイプ・オブ・南京」(\*6)を生徒たちに読むように勧めました。

その頃、サダコの両親は州議会に提出された「南京大虐殺記念日法案」反対の署名活動に参加していました。両親は法案が通った場合に、職場で気まずくなることを心配し、自分たちの両親、つまりサダコの祖父母が戦時中に受けたような侮辱的なことが再び起こること避けたかったのです。

サダコには、両親が人種差別に過剰に反応しているように思えました。カナダは民族も人種も多様です。昔のような人種差別的な政策がまた起こることは考えられません。どんな国にもその歴史には汚点があるものです。カナダでも「真実和解委員会」(\*7)で先住民の子供たちの寄宿舎学校について調査されたことがありました。

それからサダコは「日本人の右翼が、『南京大虐殺』はなかったと日系文化会館(JCCC)(\*8)で話していたそうだと両親が話しているのを耳にしました。その人たちはDVDやパンフレットを配って、自分たちの歴史修正主義の主張を広めていたのだそう。センターに苦情が届き、配布物は没収されて世話役の女性に返却されたという。こういう行動は問題を大きくして逆効果だ、とサダコの両親は嘆いていました。両親は、反発を引き起こさず静かに事が過ぎることを望んでいるようでした。

次の授業でサダコのクラスメートが、トロントスター紙(\*9)のジョイ・コガワ氏寄稿の南京大虐殺記念日を支持する記事を紹介しました。コガワ氏は、日系人コミュニティーは日系カナダ人の戦時争補償問題を思い起こすべきであると主張していました。今度は自分たちが中華系カナダ人と連帯すべきであるとのこと。記事に書いてある理由は全て納得でき公正に思えました。

サダコはジョイ・コガワ氏に会って、南京大虐殺記念日を支持するグループに入ろうと決めました。サダコの歴史の先生も協力的で、クラスでグループが出来ました。そして法案を支持するために審議の日にオンタリオ州議会に参加しに行きました。

~~~~~

上述のように、数多くの問題と歴史の歪曲が生じている。最もあるまじきことは国籍に関係なく若者が外国のプロパガンダの道具にされてしまっていることである。教育関係者に対し、警鐘すべきことである。

(4) 結論

海外での日本を貶める捏造情報キャンペーンに対し、日本政府は沈黙を続けて何も対応してこなかった。それによって海外の日本人の社会生活は著しく害を受けてきた。

日本政府はカナダの日本人学校の授業で子供たちに教えるべき知識と情報を教えず、子供たちを守るという責任を果たしてこなかった。

日本政府は、南京などのプロパガンダがカナダの連邦、郡、市の議会で討議された時に、カナダ政府側と連絡を取って話し合うべきであったにもかかわらず、全くそういう義務を放棄してきた。日本政府が何も言わなかったため、カナダ政府関係者は問題について無知のままに議論を進めた。

長年に亘る日本政府の怠慢によって、職業的にも社会的にも多くの機会が失われ、一方で計り知れない感情的・精神的な被害が生じた。

(5) 勧告

委員会には以下の勧告を求める。

日本政府は、真実が自明であるなどと思ってはいけない。努力と積極的な政策をとって情報を広め、教育し、伝達しなくてはならない。任務組織を設立し、以下のような措置をとるべきである。

- (a) 2008年の報告書「南京の実相」にその後の情報を追加し、復刻・改訂する。一次資料を基に、広く一般の人が読みやすいような、縮小改訂版を制作する。
- (b) このような本を海外の外交関係事務所、そして歴史プログラムやコースを設けている団体や学校、日本がスポンサーのプログラムなどあらゆるところに配布する。小学校や高校も含め、海外の学校に対して特別な配慮と注意をする。
- (c) 地方のメディア、学校、研究関係、市議会、議会など、問題が発生したところに対して政府として公式に対応する。
- (d) 情報格差・言葉の違い・世代経験の差を乗り越える「架け橋」プロジェクトを発展させ、一方で、敵対する勢力の資金力を抑える。

友好外交には限界がある。日系コミュニティーが最初にできたブリティッシュコロンビア州のビクトリアの桜の実話からもわかるように、友好は戦時には全く役に立たないもの

である。(*10) 1941年12月7日の夜、逮捕された日系カナダ人40名の命を守るために東条英機がとった言動を思い起こすべきである。(*11)

レポート担当「トロント正論の会」

註：

(*1) 「南京の実相」日本の前途と歴史教育を考える議員の会、2008年、日新報道

(*2) 同 21 ページ

(*3) 日本土曜学校、または補習授業校とは、海外での日本人補習学校。週末や放課後などの現地校の時間外に授業が行われる。授業は文科省のカリキュラムに沿って行われ、通常は外交関係や企業関係者の子弟が通う。最近では日本語能力のある現地の子供も受け入れている。

(*4) ナチスの科学者は優生学的な見地から多くの医療実験を行った。戦後、その科学者たち数千人が南米、中東、豪州、米国、ソ連などの受け入れ国に亡命した。多くはCIAに雇用され「ペーパークリップ作戦」などのプロジェクトに参加した。

(*5) 「南京大虐殺記念日制定」法案 79

毎年12月13日を南京大虐殺記念日に制定する法案

<https://www.ola.org/en/legislative-business/bills/parliament-41/session-2/bill-79>

(*6) 「レイプ・オブ・南京～第二次世界大戦の忘れられたホロコースト」アイリス・チャン著、1997年、Basic Books

(*7) カナダ真実和解委員会 (TRC) <http://www.trc.ca/>

2009～2015年、カナダ政府の研究。カナダ政府による同化政策として150年間にわたって先住民の子供たちがコミュニティーから引き離されて寄宿舎に入れられた問題。一方、本委員会は、理論的にも実践的にも先住民を抹殺しようとした政府の政策の本当の姿をごまかすものだという批判もある。

(*8) 日本カナダ文化センター <http://www.jccc.on.ca/en/>

(*9) トロントスター 2017年9月15日付「なぜ私は南京大虐殺記念日を支持するのか」
ジョイ・コガワ

<https://www.thestar.com/opinion/commentary/2017/09/15/why-i-support-the-nanjing-massacre-commemorative-day-act-joy-kogawa.html>

(*10) 「Gateway to Promise」最初のカナダの日系コミュニティー、Ann-Lee and Gordon Switzer 著、2017年、TI-Jean Press、第14章 Sakura of Victoria

(*11) 「石をもて追われるごとく」新保満著 大陸時報社 (1976) 213 ページ